H25.3.2

完璧な死に支度

Dr. 和の町医者日記

「抗がん剤」シリーズ⑭

薬剤中止後の終活

「まさか桜の花が見られるとは」。老人ホームを3月末で退職することになった58歳の末期肺がん患者、Aさんは、そうつぶやきました。自らの意思で抗がん剤を止めてから、みるみる元気になりました。しかしAさんは、そのころから粛々と「死に支度」を始めました。持ち物を知人にあげ始めました。

「俺が死んだらどうせ捨てられるやろ。もったいないやんか」。ギターの名手のAさんは、愛用のギターや小物も訪れる友人にあげていました。「もらってくれるなら誰でもええわ。お棺に入れて燃やすよりもええやろ？」。死ねばそうなると分かってはいても、なかなかできないのが人間というものでしょうが。

ある日訪問すると、新しい下着一式が置かれていました。触ろうとすると「それは、あげへんで！ 俺が死んだときに、着せてもらうやつ。自分では着られへんやろ。着せてくれる人も汚い下着やったらイヤやんか。だから新しい下着を買ってきてもらったんや」。笑顔でこう答えられました。

かたわらには葬儀屋さんのパンフレットと領収証もありました。「葬式の中身も支払いも、もう全部終わってん」と説明してくれました。1週間後に行くと、今度は火葬場の領収書まで置いてありました。「これでもう誰も困れへんやんか」。

さらに翌週、訪問すると、今度は寺院の領収証もありました。お骨を入れる寺の小さなコインロッカーのような箱の契約を早々に済ませて、永代供養料まで払ったといいます。世の中、終活ブームですが、さすがにそこまで準備した人を初めて見ました。

あぜんとしていると、「なんでえな。みんなどうせ死ぬやん。ちゃんとしとかんと、死んだときにみんなが困るやん」。たしかにそうですが、それを実行できる人は私の経験では極めて少ないのが現実です。

Aさんには3人の子供さんがいますが、あてにしていません。子供さんたちにお会いしましたが、みなさんとても穏やか。「おやじの好きなようにしたらいい。子供としては親の気持ちに寄り添うだけ」と淡々と話されました。

訪問からの帰り際、Aさんが珍しく私に聞いてきました。「先生、俺、あとどれくらいで死ぬの？」。「さあ、分からんわ。でもまだまだ大丈夫ちゃうのかなあ？」。本当は大丈夫でなくても、私はそう答えることにしています。「先生、きれいごとやなくて、ホンマのこと言ってーや」。「分かっとるがな。でも本当のところは、あなたは例外やからよう分からんのや」。思わず、本音で返してしまいました。ヘルパーさんや友人たちは、私たちの会話をあきれて聞いていました。

「ところで、なんでそんなこと心配するの？」。「あんまり言いたくはないけど…」。「言いたくないって？」。「実は、貯金をおろして全額寄付したんや」。「寄付？」。「そう、外国の難民活動をやっている団体に寄付したんや」。「…」。

またまた驚きました。普通のひとは、お金を子孫のために残します。しかしAさんは、ほぼ全財産をお気に入りのNPO法人に寄付してしまったのです。「先生、俺、もし春を過ぎても死なんかったら現金がゼロになるから、ちょっと養ってくれるか？」。これにはもう声も出ませんでした。

終活 「人生の終わりに向けた活動」のこと。人生の最後を迎えるにあたって行うべきことの総称。生前のうちに自身のための葬儀や墓の準備、財産相続などをノートに書き残す人が増えている。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成７年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

ひょうご